

民俗学は死をどのように 対象としてきたか 墓制分布図史の展開

How Has Folklore Dealt with Death as the Research Subject?
Historical Development of Grave Distribution Map

岩野邦康

はじめに

- ① 民俗学確立期以前の分類と分布図
- ② 民俗学確立期の分類と分布図
- ③ 民俗学研究所期の分類と分布図
- ④ 民俗学研究所期以降の分類と分布図

結語

【論文要旨】

たとえば東京近郊地域の墓制分布に関する研究は、両墓／単墓という指標よりも、屋敷墓／共同墓地といった新しい指標を用いた方が発展性があるのではないだろうか。こういった新しい視角を導入をするには、両墓／単墓という枠組に基づいた研究の展開を、民俗学史全体の動きの中で整理し、検討する必要がある。本稿では墓制に関する分類案とそれを用いた分布図の作成に注目し、墓制分布図史の展開を検討する。

学史を概観すれば、民俗を対象とする研究が、調査研究に関する枠組の共有をもっとも強く意識していた時期は、1930年代の民俗学確立期である。民俗を分類するための枠組は、分類民俗語彙、三部分類案、質問文、採集要項などというかたちで公開され共有され、墓制研究の場合、とくに両墓制という墓制に重点がおかれた。

民俗学研究所が閉鎖される1950年代末まで、両墓／単墓という枠組に拠った研究は順調に進展しており、とくに分布図を作成する動きが他分野に比べて活発であった。しかし1970年代に入ると、両墓制を軸にすえた墓制研究は停滞期に入り、両墓制が濃密に分布する地域では精緻な研究が行われる一方で、希薄な地域における研究は混迷期に入った。

ひろく民俗研究全体をみると、ある重点的な研究テーマについて、大規模な調査研究基盤に拠り共通の枠組を用いて取り組むことと、研究者が個別にテーマを設定し自由に研究を行うことは、とくに資料の蓄積～交換という資料管理の面で二律背反の関係をもつ側面がある。学史をひもとくと、民俗学における資料管理は、資料の規模が整序の枠組の限界を超えた段階で破綻する傾向がある。これからの民俗資料論はこういった傾向を克服し、調査研究枠組の共有と個別研究の多様性とを並立させる方向性を模索しなければならない。

キーワード：民俗学史、墓制研究、民俗分布図、民俗資料論、分類民俗語彙